

# 17～19 世紀オペラにおけるメデア(講演資料)

水谷 彰良

初出は2012年9月15日、東京大学駒場キャンパスにおける日本アルバン・ベルク協会第53回例会「オペラにおけるメデア像の変遷」講演の配布資料。その後、日生劇場開場50周年記念事業《ライマン・プロジェクト2012》講演録(発行:日生劇場、2013年5月25日)に再録しましたが、HP掲載の別稿「19世紀までのオペラにおけるメデア像の変遷」の参考資料として、書式と一部字句を変更して追加掲載します。(2013年10月)

## I. ギリシア神話と古代文学のメデア

### ◎ギリシア神話(伝承)～オウィディウス『変身譚』に至るイアーソンとメーディア[メデア]

イアーソン(Iason)はアイソンの子でアイオロスの後裔。アイソンから支配を奪った異父兄弟ペリアースに王権の返還を求め、金毛の羊皮を持参するよう要求されると、アルゴナウテースを率いて遠征に出る。

メーディア(Medeia)の協力で金毛の羊皮を手に入れたイアーソンは、メーディアと結婚して帰国するが、アイソンがペリアースに迫られて自殺すると、メーディアはその復讐にペリアースの娘たちを騙して父親を切り刻んで大釜で煮殺させ、イアーソンと共に国を追われた。コリントスに来た二人は10年間幸せに暮らしたが、イアーソンはコリントス王クレオンの娘クレウーサ(またはグラウケー)と結婚するためメーディアと離婚する。怒ったメーディアはイアーソンとの間にもうけた二人の子(メルメレスとペレース)を殺し、毒に浸した衣をクレウーサに送り、クレウーサとその父クレオンを衣から発する火で焼き殺した。その後イアーソンはペーレウスと共にイオールコス市を襲い、この地の王となった。

- ・オウィディウス(Publius Ovidius Naso,紀元前43・紀元17)の『変身譚[転身物語](*Metamorphoses*)』は、後世の劇作品の物語の原点と位置づけられる。

### ◎エウリピデスの悲劇「メデア(*Μήδεια* [Mēdeia])」(紀元前431年初演)

- ・作者はエウリピデス(Ευριπίδης Euripides,紀元前480年頃・紀元前406年頃)。
- ・登場人物は、メデア、イアソン、クレオン(コリントスの王)、アイゲウス(アテナイの王)、メデアの乳母、二人の子供(台詞あり)、子守、合唱隊(コリントスの女たち)、使者。

#### 物語

コルキスの王女メデアはイアソンに協力して金羊皮を奪わせて祖国を去り、コリントスで暮らしていた。メデアは二人の子を産んでいた(以上、前段の物語)。だが、コリントスの王クレオンは自分の娘とイアソンの結婚を望み、イアソンもこれを承諾する。クレオンに国外追放を命じられたメデアは1日の猶予を求め、イアソンとクレオン父娘への復讐を決意する。メデアは追放後の反故をアテナイ王アイゲウスに約束させると、毒を仕込んだ贈り物で王クレオンと王女を殺害する。そして二人の子を殺してなきがらをイアソンに見せると、死体を渡さずにそのまま龍車で去る。

### ◎アポローニオスの叙事詩『アルゴナウティカ(*Argonautika*)』(紀元前3世紀)

- ・作者はアポローニオス(Apollōnios,紀元前3世紀・前246以降)。アルゴ船の冒険譚で、金羊皮を奪うまでが描かれ、メデアは全4巻のうち第3巻と第4巻に現れる。
- ・子殺しのメデアとは無縁であるが、その題材はカヴァッリ《ジャゾーネ》の台本の基になっている(下記)。

### ◎セネカの悲劇「メデア(*Medea*)」

- ・作者はルキウス・アンナエウス・セネカ(Lucius Annaeus Seneca,紀元前1年頃・65)。初演は不明で、晩年の作とされる。
- ・登場人物は、メデア、イアソン、クレオ(コリントスの王)、メデアの乳母、合唱隊(コリントスの女たち)、使者、二人の子供(黙役)のみ。物語に相当する出来事はすべて個人の長台詞で語られ、人物間の対話は少なく、劇的なアクションは終盤に集中している。そこでメデアは子の一人を刺し殺し、その遺体を抱いて生きた息子の手を取って館の屋根にのぼり、続くイアソンとの対話のさなかもう一人の子を殺すと、屋根からイアソンに向かって子供死体を放り投げる。
- ・エウリピデスが人間メデアとしたのに対し、セネカはメデアを伝承どおりの魔女(非人間的な存在)に戻した。それゆえ人間的な悲嘆とは無縁で、人間であるイアソンとは本質的に相容れない。それゆえ自分を裏切った「人

間＝人類」に対する容赦ない復讐を遂げる。

★アンジュラン・プレルジョカージュ(Angelin Preljočaj,1957-)振り付けのバレエ《メデの夢 *Le Songe de Médée*》(音楽:マウロ・ランツァ。パリ・オペラ座の委嘱作品。2004年)より メデ:マリ=アニェス・ジロ Opus Arte OA 0981 D 2:53

## II. 17世紀の劇とオペラのメデア

### コルネイユの《メデ》(1635年) \*近代演劇におけるメデアの出発点

題名 メデ (*Médée*) (トラジェディ tragédie、5幕)

台本 ピエール・コルネイユ (Pierre Corneille,1606-84)

原作(題材) セネカ『メデア』

初演 1635年マレ劇場 (Théâtre du Marais) 同年パリ刊

主な登場人物 クレオン (コリントスの王)、クレューズ (クレオンの娘)、エジェ (アテネの王)、ジャゾン (メデの夫)、メデ (魔女。ジャゾンの妻)、ポリュクス (ジャゾンの友人)、ネリーヌ (メデの侍女)

#### 劇の要点

第1幕:クレューズとの結婚を決意したジャゾンは、メデを排除することにする(第1・2場)。ジャゾンはメデとの間にもうけた二人の子を残すようクレューズに求め、彼女はこれを了承する(第3場)。メデは復讐の女神にジャゾンへの復讐を誓う。そして侍女ネリーヌと話し合い、激しい怒りにかられる(第4・5 [最終場])。

第2幕:メデはまだジャゾンを愛しており、彼を生かしておくことにする(第1場)。クレューズはメデの子供の世話をする見返りに、メデに花嫁衣裳を求める(第4場)。エジェはクレューズに求婚を拒絶され、クレオンとの戦争を決意する(最終場 [第5場])。

第3幕:メデはコリントスから去ると偽り、二人の子を連れて行きたいと申し出るが、ジャゾンに拒否される。メデはジャゾンの弱みを知る(第3場)。ネリーヌがメデに、クレューズに対する復讐の方法を助言する(最終場 [第4場])。

第4幕:魔法の洞窟。メデは魔法を使ってクレューズに贈る衣に毒を仕込む。メデは、エジェが敗北して投獄されたことを知る(第1場)。クレューズに衣装が届けられる(第3場)。メデは魔法の杖を使ってエジェを救出する(最終場 [第5場])。

第5幕:メデは自分の魔法が効力を発揮し、クレューズと父王クレオンが死にかけているのを知る(第1場)。メデは復讐を完結するため、二人の子を殺すことを決意する(第2場)。狂乱の末にクレオン、次いでクレューズが死ぬ(第3・4場)。ジャゾンが来てクレューズのなきがらにメデへの復讐を誓う(第5場)。メデが現れ、血のついた短剣を示しておまえの子供を殺したと告げ、龍の引く戦車で飛び去る(第6場)。絶望したジャゾンは自殺する(最終場 [第7場])。

#### メデア像

- ・セネカの『メデア』を原作とするが、クレューズを登場させ、クレオンの狂死と毒を仕込んだ衣によるクレューズの死を舞台上で描く。またジャゾンの自殺で締め括るなど、演劇的な面での追加が多く、後の劇とオペラに影響を与えた。
- ・魔女としてのメデアの性格とイメージは基本的にセネカと同じ。

### カヴァッリ《ジャゾーネ》(1649年) \*メデアを題材とする最初のオペラ

題名 ジャゾーネ (*Giasone*) (ドラマ・ムジカーレ dramma musicale、プロローゴと3幕)

作曲 フランチェスコ・カヴァッリ (Francesco Cavalli,1602-76)

台本 ジャチント・アンドレア・チコニーニ (Giacinto Andrea Cicognini,1606-50)

原作(題材) アポローニオス (Apollōnios,紀元前3世紀~紀元前246以降)の『アルゴナウティカ (*Argonautika*)』(紀元前3世紀)

初演 1649年1月5日、ヴェネツィア、サン・カッシアーノ劇場 (Teatro San Cassiano)

#### メモ

- ・17世紀中に最も数多く再演されたヒット作。喜劇と悲劇の混合で、アリアとレチタティーヴォの分化はこの作品で決定的となったとされる。アポローニオスの原作はあくまで素材にすぎず、物語はチコニーニが自由に脚色している。
- ・物語の大筋は、金羊皮を奪うプロセス(第1・2幕)に、ジャゾーネ、メデア、イジーフィレ、エジェオの四画関係の恋とその結末(第1~3幕)を描く。最後はハッピーエンド。

#### 劇の要点

- ・ジャゾーネは相手がメデアと知らずに1年間関係を持つ(その間にメデアは双子の子を産む)、そして相手がメデアと知って喜ぶ。メデアはかつての恋人エジェオを拒否する(第1幕)。

- ・ジャゾーネはかつてイジーフィレとも関係を持ち、イジーフィレは双子の子を産んでいた。彼女はジャゾーネが他の女と恋仲になったと知り、恋敵を殺そうと決意する。
- ・ジャゾーネはイジーフィレと再会すると、元の鞘に収まると約束する。その会話を聞いたメデアは、ジャゾーネにイジーフィレを殺すと誓わせる。だが、ジャゾーネから女の殺害を命じられたベツソは、メデアを海に投げ込む。溺れていたメデアを救ったエジェーオは、復讐にジャゾーネを殺すと約束し、寝ているジャゾーネを刺そうとするが、イジーフィレがそれを阻止し、暗殺者と誤解されて捕られる。そこに現れたメデアは、自分を救ってくれたエジェーオを愛することにしたと告げ、ジャゾーネにイジーフィレを愛するよう促す。イジーフィレの嘆きに同情したジャゾーネを受け入れ、二組のカップルがめでたく成立する。

#### メデア像

- ・メデアの登場する最初のオペラ。この題材による最初のヴァリエーションで『アルゴナウティカ』に素材を求め、金羊皮を奪うプロセスを中心に、メデアとイアーソーンの恋とその行方を描く。
- ・魔女のメデアは劇中で魔術を用いるものの、人間に対して行使しない。それゆえ魔女としての側面は弱い（第1幕第15場で黄泉の国の精霊を呼び出し、ジャゾーネと結ばれるよう助力を求める。ベツソに海に投げ込まれて溺死しそうになる）。
- ・情熱的ではあるが女らしい優しさも持つ（復讐心は一時的。命の恩人となった元恋人への愛を選び、ジャゾーネにイジーフィレを選ぶよう促す）。
- ・メデアとイジーフィレは共にジャゾーネとの間に双子の子を産んでいるが、二人ともジャゾーネへの復讐を考えない（劇に子供が登場しない。二人とも恋敵を殺そうとするが、自分の手でやろうとは考えず、子供を殺す発想もゼロ）。
- ・17世紀中の最も数多く再演されたが、「恐ろしい女」「子殺しの女」としてのメデア像の流布とは無縁。

★カヴァッリ《ジャゾーネ》ダイジェスト。2010年5月フランドル・オペラ上演。フェデリコ・マリア・サルデッリ指揮フランドル・オペラ交響楽団 ジャゾーネ:クリストフ・デュモー、メデア:カターリナ・ブラディチ、イジーフィレ:ロビン・ヨハンセンほか Dynamic 33663 (DVD)

#### リュリ《テゼ》(1675年) \*メデアの後日譚またはヴァリエーションによる最初のフランス・オペラ

題名 テゼ (*Thésée*) (トラジェディ・アン・ミュージック tragédie en musique、プロローグと5幕)

作曲 ジャン=バティスト・リュリ (Jean-Baptiste Lully, 1632-87)

台本 フィリップ・キノー (Philippe Quinault, 1635-88)

題材 (題材) オウィディウス (Publius Ovidius Naso, 紀元前43~紀元後17) の『変身譚 (*Metamorphoses*)』

初演 1675年1月11日、サン=ジェルマン=アン=レの宮廷劇場 (サル・デ・バレ)

#### メモ

- ・リュリ3作目の音楽悲劇。題材をオウィディウス『変身譚』に求めたが、事実上フィリップ・キノーの創作と理解でき、メデアはジャソンの子を殺してコリントスを去ってアテナイに逃れた後の人物であり、子殺しのシチュエーションは無い。
- ・17~18世紀にパリ・オペラ座で多数の再演が行われ、キノーの台本はヘンデル《テーゼオ》(後述)の原作となる。
- ・金羊皮の物語と関係が無く、大筋は、国王エジェ、その庇護を受けるエグレ、彼女と恋仲のテゼの三者を中心に展開し、魔女メデアは第2幕以降に重要な存在となる。結末に「デウス・エクス・マキナ (機械仕掛けで現れる神)」を採用。

#### 劇の要点

- ・国王エジェの庇護を受けるエグレはテゼと愛し合い、エジェはメデアと結婚の約束をしている。しかし、エジェはエグレに求婚し、メデアは自分の息子と結婚させると言う(第1幕)。
- ・メデアもテゼを愛しており、国王にエジェとの結婚を勧める。民衆から次の王に求められているテゼは、メデアの協力を取り付けるが、彼がエグレを愛していることを知ったメデアは嫉妬に狂い、復讐を誓う(第2幕)。
- ・メデアはエグレに国王との結婚を勧めるが、エグレがテゼに対する愛を聞かされて激怒し、自分の魔力で二人の仲を引き裂くと宣言し、地獄の住人を呼び出してエグレを襲わせる(第3幕)。
- ・それでもエグレが屈しないので、メデアは亡霊たちに眠っているテゼを連れてこさせる。そして復讐の女神を呼び出し、テゼを諦めなければこの場で彼を殺すと脅す。エグレは彼を救うために国王との結婚を約束するが、目覚めたテゼは彼女と共に互いを助けるようメデアに懇願し、心を動かされたメデアはテゼに剣を返す(第4幕)。
- ・メデアは国王にテゼを毒殺するよう仕向けるが、国王はテゼの剣を見て彼が自分の息子であることに気づく。それを見たメデアはその場を立ち去るが、国王がエグレとテゼを結ばせようとする、龍の引く戦車に乗って現れ、復讐を叫んで宮殿を破壊するが、ミネルヴァが現れて壮麗な宮殿をたちどころに再建し、一同喜びに包まれる(第5幕)。

#### メデア像

- ・嫉妬にかられる女、魔女としての側面がクローズアップされ、亡霊や復讐の女神を呼び出して恋敵に恐怖を与える。敗北を悟ると龍の引く戦車に乗って現れ、復讐を叫んで宮殿を破壊するというのはアルミードと同じ。

★リュリ《テゼ》第3幕、第5幕より。1998年アンプロネ音楽祭。ウィリアム・クリスティ指揮レザール・フロリッサン(アンプロネのヨーロッパ・バロック・アカデミーのソリスト、合唱、管弦楽によるセミステージ形式の全曲演奏。フランス3放送映像より 8:50/5:30)

### シャルパンティエ《メデ》(1693年) \*子殺しのメデアを描くオペラ

題名 メデ (*Medée*) (トラジェディ・アン・ミュージック *tragédie en musique*、プロローグと5幕)  
作曲 マルカントワヌ・シャルパンティエ (Marc-Antoine Charpentier, 1645/50?-1740)  
台本 トマ・コルネイユ (Thomas Corneille, 1625-1709)  
題材 エウリピデスとセネカ?  
初演 1693年12月4日、パリの王立音楽アカデミー劇場 (オペラ座)

#### メモ

- ・シャルパンティエはリュリ後の最も優れた作曲家で、代表作《メデ》はルイ14世にも絶賛された。台本作家トマ・コルネイユは高名な劇作家ピエール・コルネイユ (Pierre Corneille, 1606-84) の弟で、ピエールは前記の劇『メデ (*Medée*)』(1635年)の作者。
- ・子供の殺害は描かれないが、メデの登場シーン以外にも見どころが多く、クレオン王の狂乱や、徐々に衣の毒が回ってクレューズが死ぬさまがリアルに描写される (17~18世紀のオペラでは異例)。

#### 劇の要点

プロローグ (ルイ14世を称える内容)

第1幕：魔女メデ (ジャズンが金羊皮を奪う手助けをし、すでに二人の子を産んでいる) は、ジャズンの愛がコリント王クレオンの娘クレューズに移ったことを嘆く。ジャズンが来て、自分はクレューズに国王へのとりなしを求め、二人がコリントで長く暮らせるように頼んでいると言ってメデを安心させる。だが、ジャズンの心はメデとクレューズとの間で揺れ動く。クレューズの婚約者であるアルゴスの王子オロントがコリントに到着し、歓迎される。

第2幕：クレオン王からコリントを去るよう求められたメデは、仕方なく子供をクレューズに預けることに同意する。クレオン父娘から、メデを追放してジャズンのみをコリントに残したいとの計画を聞かされたジャズンは賛同し、なにも知らぬオロントも愛の神に扮した少年たちのページェントに加わって愛を称える。

第3幕：メデはオロントにジャズンがクレューズを愛していると教え、二人で復讐を誓う。メデはジャズンの愛を取り戻したいが拒否され、激怒する。そして嫉妬と復讐の悪霊を呼び出してクレューズに贈る衣に毒をふりかける。

第4幕：ジャズンの裏切りを確信したメデは復讐を決意し、魔術を使ってクレオン王を狂人にしてしまう。

第5幕：ジャズンへの復讐に、メデは子供を殺す決心をする。そこにクレューズが来て、父王を正気に戻してほしいと懇願するが、メデは取り合わない。そこにクレオン王がオロントを殺して自殺したとの報せが届く。絶望したクレューズはメデへの復讐を誓うが、衣の毒が効きはじめ、駆けつけたジャズンに抱かれて息を引き取る。そこにメデが現れ、復讐にお前の子供を殺してやったと告げ、宮殿に火を放って龍に乗って飛び去る。

#### メデア像

- ・リュリ《テゼ》のメデと同様、嫉妬にかられる女で、復讐心の虜でもあるが、第5幕で二人の子供を殺すべきか自問自答する。
- ・メデの魔女としての側面がクローズアップされ、第3幕に深い苦悩を吐露する素晴らしいモノローグがある。同幕終盤に魔術を使って悪霊や怪物を呼び出し、第5幕最終場で龍に乗って現れるなど、スペクタクルな見せ場も多い。
- ・メデは全部の幕に登場し、それぞれに異なる情念を表現しており、同時代の批評もメデの情念が鮮やかに描かれ、この役が朗読だけで演じられても聴衆は深い感動に誘われると称えられている。

★シャルパンティエ《メデ》(1693年)より第3幕第3場(メデのモノローグ)、第3幕最終場(第7場。魔術で悪霊に呼びかけ、現れた化物にデーモンが毒をふりかけて即死させると、メデはその毒を衣にかける)、第5幕第1場(メデはジャズンへの復讐に子供たちを殺すべきか自問自答する)、第5・6場(衣の毒が徐々に効き始めた瀕死のクレューズと、ジャズンへの嘆き)、第7場・最終場[第8場](クレューズのなきがらが運び出され、絶望するジャズンの前に龍に乗ったメデが現れ、子供を殺したと教え、宮殿に火を放って飛び去る) 1994年5月ニューヨーク・ブルックリン音楽アカデミー上演の稽古映像 ウィリアム・クリスティ指揮 5:16/4:20/3:20/1:41/3:23 (合計18分)

## III. 18世紀のメデア

### ヘンデル《テゼオ》(1713年) \*リュリ《テゼ》のイタリア・オペラ版

題名 テゼオ (*Teseo*) (ドラマ・トラージコ *dramma tragico*、5幕)  
台本 ニコラ・フランチェスコ・ハイム (Nicola Francesco Haym, 1678-1729) が前記リュリ《テゼ》のフィリップ・キノー台本をイタリア語訳して翻案。

初演 1713年1月10日ロンドン、ヘイマーケット女王劇場

#### メモ

- ・台本がリュリ《テゼ》の翻訳のためヘンデル唯一の5幕物。《リナルド》に続く2作目の魔法オペラであることから魔女メデアの存在感が大きく、スペクタクルな舞台効果も狙っている（第4幕の魔法の島や第5幕に登場する竜に引かれる戦車など）。メデア像も基本的にリュリと同じ。
- ・重要な登場人物は、エジェーオ（アテネの王）、メデア（魔女）、アジレーア（エジェーオの保護を受ける王女）、テーゼオ（異国の王子で劇の最後にエジェーオの息子と判明）の4人で、アジレーアとテーゼオにメデアが横恋慕する。
- ・イタリア・オペラの「退場アリア」の形式ではなく、人物が1曲ごとに退場せずにレチタティーヴォとアリアを続けて歌うパターンが多い。フランス・オペラの影響を受けてオーケストラの規模も大きく、色彩豊かで、9つのアリアがオーボエのソロを伴うなど楽器のソロの関与も多く、二重唱も4曲と通例より多い。
- ・ヘンデルはダ・カーポ付きアリアの形式を用いながらも、音楽で人物の性格を巧みに描写する。
- ・リュリ作品と同様、「デウス・エクス・マキナ」によるハッピーエンドを採用。

★ヘンデル《テーゼオ》より第4幕メデアのアリア（屈しないアジレーアを威嚇し、復讐の女神を呼び出す）、第5幕メデアのアリア（復讐を遂げたら自分も死のうと歌う）、レチタティーヴォ（テーゼオがエジェーオの息子と判明）、最終場（龍の引く戦車に乗って現れたメデアが復讐を叫んで宮殿を破壊するが、ミネルヴァの登場でハッピーエンドとなる）。2004年7月ハレ・ヘンデル音楽祭上演 ヴォルフガング・カッチュナー指揮 メデア:マリア・リッカルダ・ヴェッセリング Arthaus 100709(DVD)

#### ノヴェール《メデとジャゾン》(1763年) \*バレエのメデア

題名 メデとジャゾン (*Médée et Jason*) (バレ ballet, 2幕?)

作・振り付け ジャン=ジョルジュ・ノヴェール (Jean-Georges Noverre, 1727-1810)

作曲 ジャン=ジョゼフ・ロドルフ (Jean-Joseph Rodolphe, 1730-1812)

初演 1763年2月11日、シュトゥットガルト、宮廷劇場

#### メモ

- ・メデを題材とする最初のバレエ。作者ノヴェールは18世紀のフランスを代表する著名な舞踏家。
- ・最終場でメデは龍の車で現れる。そこには一人の子供の死体があり、もう一人は舞台上でメデが刺殺する。メデは復讐の女神に命じて短剣をジャゾンに渡し、ジャゾンはこれで自殺する。宮殿が崩壊し、炎に包まれて幕を下ろす。

#### ベンダ《メデア》(1775年) \*メロドラマのメデア

題名 メデア (*Medea*) (メロドラマ/メロドラマ、1幕)

作曲 ゲオルク・アントン・ベンダ (Jiří Antonín Benda, 1722-95)

台本 フリードリヒ・ヴィルヘルム・ゴッター (Friedrich Wilhelm Gotter, 1746-97)

初演 1775年5月1日、ライプツィヒ、シュトゥットガルト、Rannstädter tor

#### メモ

- ・音楽に合わせて役者が劇を語るメロドラマ/メロドラマの形式による作品。モーツァルトも感激して感銘を受けた(1778年11月12日の手紙)。時間の関係で本日は省略

#### ケルビーニ《メデ》(1797年) \*最も有名なメデア・オペラ

題名 メデ (*Medée*) (オペラ Opéra, 3幕 [実質的にオペラ・コミック形式によるトラジェディ])

作曲 ルイージ・ケルビーニ (Luigi Cherubini, 1760-1842)

台本 フランソワ=ブノワ・オフマン (François-Benoît Hoffman, 1760-1828)

初演 1797年3月13日 パリ、フェドー劇場 (Théâtre Feydeau)

#### メモ

- ・メデア・オペラとして最も有名な作品。楽曲と楽曲の間を台詞で繋ぐオペラ・コミックとして作曲され、知識人の評価は高かったが、公演は20回で打ち切れ、以後パリでは20世紀半ばまで上演されなかった。
- ・この作品を高く評価したのはドイツ圏で、ベルリンでは1800年4月17日の初演から1880年まで上演され続けた。1803年にはヴィーン初演され、ケルビーニは1809年の同地の上演に際して約500小節をカットした(ヴィーンでは1871年にもレパートリーに残っていた)。但し、ドイツ圏では19世紀半ばにフランツ・パウル・ラハナーが作成した台詞を伴奏付きレチタティーヴォに置き換えたヴァージョンで定着し、1980年代までの上演に用いられたのはこの版による。
- ・これに対し、イタリアでの上演は20世紀になるまで行われず、その初演は1909年12月30日にミラーノのスカラ座にてカルロ・ザンガリーニによるイタリア語版で行われ、その楽譜は1980年までイタリア語による標準

的なヴァージョンとして使われた。この作品が真に注目されたのは、1952年の第16回フィレンツェ五月音楽祭においてである（マリア・カラス主演。以後カラスによる再演と録音を通じて流布。これも台詞を伴奏付きレチタティーヴォにしたヴァージョン）。

- ・ケルビーニのオリジナル・フランス語版は台詞を縮小した形で1984年7月28日にバックストン・フェスティヴァルで復活し、1989年11月6日にはコヴェントガーデンでも上演。この作品の真実は、オペラ・コミックの形式でフランス語上演しないと判らない（初演版またはケルビーニ自身によるカット版）。第三者による伴奏付きレチタティーヴォ版やイタリア語版《メデア》は、よりドラマティックかつ効果的だが、本来のケルビーニ作品とは別物と考えるべき。

#### 劇の要点

第1幕：コリントス王クレオンの娘ディルセは、ジャズンとの結婚を了承するが、不安にかられる。クレオンはジャズンにメデアの子供を守ると約束する。アルゴ船の乗組員が金羊皮を含む戦利品を届け、人々はこれを喜び、ディルセとジャズンの結婚を祝福する。だが、ディルセがメデアの怒りを怖れるので、ジャズンはディルセへの愛と保護を力強く約束する（第1～3場）。

見知らぬ女が王宮に来たとの報告があり、メデアが現れる。クレオンがメデアに立ち去るよう命じ、恐怖にかられた人々が逃げ去る。メデアはジャズンの愛を取り戻そうとするが、ジャズンからディルセとの結婚を告げられると復讐を誓う（第4～最終場〔第7場〕）。

第2幕：怒り狂うメデアはディルセとクレオンに対する復讐を誓い、冥府の神々に協力を求める（第1場）。侍女ネリーヌはメデアの運命を嘆く（第4場）。クレオンから1日の猶予をもらったメデアは、ジャズンとの対話で彼の子供への愛情を知って復讐の方法を思い立つ。そして甘言を使ってもう一度子供に会わせて頼み、ジャズンも同意する（第5場）。ネリーヌは子供を救うようメデアを説得するが（第6場）、ジャズンの結婚式の開始を知ったメデアは復讐を誓う（最終場〔第7場〕）。

第3幕：激しい嵐の音楽がメデアの感情を表現する（間奏曲）。メデアは地獄の神々に嘆願し、子供への愛と憎しみに苦悩する（第1場）。メデアはネリーヌが連れてきた二人の子供を殺そうとするが断念し、ネリーヌは子供たちを神殿に隠す（第2場）。一人になったメデアは子殺しを逡巡しながらも、あらためて自分の手で殺そうと決意する（第3場）。メデアが贈った毒を塗った衣装と冠、宝石を身に着けたディルセとクレオンが死んだとの人々の叫びを聞いたメデアは、迷いを捨てて短剣を手に神殿に駆け込む。入れ替わりにジャズンと人々が現れ、メデアへの復讐を叫ぶ。そこに血のついた短剣を手にメデアが来てジャズンに子供を殺したと告げ、お前は死ぬまで放浪し、地獄で私と再会しろと言って去る。神殿が炎に包まれ、人々の阿鼻叫喚で幕を下ろす。

- ★ケルビーニ《メデア》（イタリア語版《メデア》）より第2幕ジャズンとメデアの対話と二重唱（第5場、メデアがジャズンの弱みを知る）、最終場（結婚式の開始を知ったメデアの怒り）、第3幕の間奏曲とメデアのモノローグ（子殺しを逡巡するメデア）、最終場 2008年トリノー王立劇場上演 エヴェリーノ・ピド指揮 メデア：カテリーナ・アントナッチ、ジャズーネ：ジュゼッペ・フィリアノーティ クラシカ放送映像より 3:25 / 1:53 / 4:53 / 7:15

## IV. 19世紀イタリア・オペラのメデア

### マイル 《コリントのメデア》（1813年）

題名 コリントのメデア (*Medea in Corinto*) (メロドラママ・トラージコ melodramma tragico, 2幕)  
作曲 ジョヴァンニ・シモーネ・マイル (Giovanni Simone Mayr [Simon Mayr], 1763-1845)  
台本 フェリーチェ・ロマーニ (Felice Romani, 1788-1865)  
原作 エウリピデスの悲劇『メデア』(紀元前431年)  
初演：1813年11月28日ナポリ、サン・カルロ劇場

#### メモ

- ・基本的にエウリピデスの原作に沿った内容であるが、台本作家ロマーニはケルビーニ《メデア》を知っていた。
- ・当時のイタリア・オペラの慣習に沿ってマイルは当初ジャズーネ役に男装コントラルトを当てようとした形跡がある。また、楽曲と楽曲の間の対話はレチタティーヴォ・セッコで作曲されたが、劇場側の求めでマイル自身がレチタティーヴォ・アッコムパニヤートに書き換えた。
- ・楽曲と形式は同時代（1800～1810年代）のオペラ・セーリアと同じ。物語はケルビーニ作品とは少し異なり、アテネ王エジェーオがメデアの協力者として登場する（結果的に「ジャズーネとクレウーザ」「メデアとエジェーオ」の二組の男女がメインになるが、メデアがエジェーオに惚れることはない）。

#### 劇の要点

第1幕：アカストに勝利したジャズーネが凱旋する。彼はメデアと離婚してコリント王クレオンテの娘クレウーザとの結婚を望んでいるが、アテネの王エジェーオの反対を心配している。魔女であるメデアは、人間である夫ジャズーネが自分を裏切ったら報復するよう全能の神々に嘆願するが、復讐では自分の心が収まらないうと愛の神に呼びかけ（第7場メデアのカヴァティーナ）、再会したジャズーネにクレウーザと別れるよう説得する。エジェーオがコリントに到着し、ジャズーネとクレウーザの結婚を知る。エジェーオはメデアと手を結び、二人はジャズーネとクレウーザの結婚祝いに乱入して台無しにする。

第 2 幕：エジェオと戦っているジャゾーネの帰りを待つクレウザは、ジャゾーネと結ばれる喜びにひたりながらもメデアを怖れている。クレオンテは娘を励まし、部下にエジェオの投獄を命じる。メデアはクレウザに贈るため毒を仕込んだ花嫁衣装を用意し、牢獄からエジェオを救出する。勝利の美酒に酔うジャゾーネに、クレウザの死が伝えられる。クレウザの殺害だけでは心が満たされないメデアは、さらなる復讐のため二人の子を殺そうとするが果たせない。しかし、子供にジャゾーネの面影を認めると、「私はもう彼の妻ではないから、お前たちの母でもない」と言って殺害を決意する。エジェオがジャゾーネを殺そうとするとメデアがそれを止め、ジャゾーネに「お前の子供を殺した」と告げ、妻と子を失ったお前は絶望の中で生きればよいと言い捨てて去り、人々が恐怖の叫びをあげる。

### メデア像

- ・イタリアがフランスの支配を受けた時代の作品で、フランスのトラジェディ・リリックの趣味を反映している（題材がメデアとされ、レチタティーヴォ・セッコの不採用もこれに起因する）。
- ・ここでのメデア像は基本的にケルビーニ作品と同じ（魔女にして復讐心に捉われた女。クレウザの殺害では満足できず二人の子を殺し、絶望するジャゾーネを残して去る）。ケルビーニと同様、メデアが二人の子を殺そうとして逡巡し、いったんはこれを断念しようとするが、迷いを捨てて実行を決断する。

★マイル《コリントのメデア》第 2 幕より第 8 曲メデアの呪文、第 13 曲メデアの Aria、第 14 曲フィナーレ末尾 2010 年バイエルン国立歌劇場上演ライブ アイヴァー・ボルトン指揮 メデア：ナージャ・ミヒヤエル、ジャゾーネ：ラモン・ヴァルガス Arthaus Musik 4:46 / 5:11 / 4:16

### 王政復古後のイタリア・オペラの変化（1815 年～30 年代）

- ・ロッシーニの《オテッロ》（1816 年）において、舞台上における殺人（オテッロによるデズデーモナの殺害）と主人公の自殺を描くことに成功し、続いて舞台上でのヒロインの自殺をクライマックスとする《マオメット 2 世》（1820 年）が作られた。
- ・初期ロマン派の台頭で、ヒロインが自分の子を殺そうとして逡巡し、これを諦めて手放すとのシチュエーションが人気を博す。ベッリーニの《ノルマ》（1831 年）では、子殺しによる男への復讐よりも母親としての愛情が勝つ。
- ・第 2 幕、ノルマはポッリオネとの間に産んだ二人の子供を殺そうとするが、可愛い寝顔を見て断念する。⇒ ノルマはアダルジーザに、ポッリオネと結婚してローマに行くよう言い、死を覚悟しているノルマは二人の子供を育ててくれるよう頼む（以上、ノルマとアダルジーザの二重唱。第 2 幕フィナーレでは死刑を前に、ノルマは父オロヴェージュに対して二人の子の命乞いをし、その面倒をみてくれるよう嘆願する）。
- ・《ノルマ》の台本作家は《コリントのメデア》のフェリーチェ・ロマーニ。原作となるアレクサンドル・スメのフランス語の韻文悲劇『ノルマ』では第 5 幕でノルマが深い淵に身投げするが、ロマーニはこれを採用しなかった。
- ・ギリシア神話を題材とするオペラの人気が低下し、ルネサンス以降の近代史（とくにイギリス）を題材とするドラマに取って代わられる。王朝物であっても、ヒロインの女王を恋する女、苦悩する女として描くドニゼッティ作品が現れる（アンナ・ボレーナ、マリア・ストゥアルダ etc.）。プリマ・ドンナ・オペラの様式が確立され、ヒロインに焦点を当て、その Aria・フィナーレで閉じる作品が人気を博す。
- ・メデア物でこうした変化を端的に表しているのが次に挙げるパチーニの《メデア》（1843 年）で、メデアは魔女ではなく一人の女となり、最終的に子を殺して復讐を遂げるとみずから命を絶つ。

★ベッリーニ《ノルマ》第 2 幕より第 8 曲メデアの呪文、第 13 曲メデアの Aria、第 14 曲フィナーレ末尾 2010 年バイエルン国立歌劇場上演ライブ アイヴァー・ボルトン指揮 メデア：ナージャ・ミヒヤエル、ジャゾーネ：ラモン・ヴァルガス Arthaus Musik 4:46 / 5:11 / 4:16

### パチーニ《メデア》（1843 年）

題名 メデア (*Medea*) (トラジェディ・リリック *tragedia lirica*、3 幕)  
 作曲 ジョヴァンニ・パチーニ (Giovanni Pacini, 1796-1867)  
 台本 ベネデット・カスティリア (Benedetto Castiglia, 1811-77)  
 原作 エウリピデスの悲劇『メデア』(紀元前 431 年)  
 初演：1843 年 11 月 28 日、パレルモ、カロリーノ劇場

### メモ

- ・マイル《コリントのメデア》以後の最も重要なオペラ。作曲家パチーニはメルカダンテ（後出）と共にロッシーニの後継者と目され、劇作と音楽の双方でロッシーニの影響が大きい（但し、1830 年以降の作品はロマン派メロドラマにシフトし、管弦楽と合唱を重視する改革オペラを作曲）。
- ・登場人物は、メデア、クレオンテ、ジャゾーネ、カッサンドラ、カルカンテの五人で、二人の子（黙役）も登場。
- ・メデアはもはや魔女ではなく一人の女として描かれる。ジャゾーネの新たな結婚相手グラウカは登場せず、物

語は基本的にメデアとジャゾーネを中心に、国王クレオンテが絡んで推移する。メデアは二人の子を残してコリントを去ることに同意するが、最終的に二人の子を殺して復讐を遂げ、自殺する。

### 劇の要点

物語の流れは次のとおり（メデアはジャゾーネと結婚している）。

第1幕：メデアは夫の帰宅が遅いと嘆き、彼が不実をはたらいたら復讐すると誓う（第3場）。ジャゾーネが帰宅して口論となる。ジャゾーネはメデアへの愛情を請け合うが、その誓いを拒んでメデアを激怒させる（最終場 [第5場]）。

第2幕：メデアはジャゾーネの侍女クレウーザと偽り、国王クレオンテからジャゾーネがグラウカと結婚することを聞き出すと激怒し、クレオンテと口論になる（第4場）。メデアはジャゾーネとグラウカの結婚祝いに乱入し、ジャゾーネの裏切り責める。メデアはその場を追い出され、二人の子は取り残される。メデアは呪いの言葉を吐き、神々に嘆願する（最終場 [第9場]）。

第3幕：メデアに呼ばれたジャゾーネは、二人の子を自分に残してコリントを去るようメデアに嘆願する（第4場）。そこにクレオンテが現れ、執拗に説得を続けると、メデアはコリントを去ることを了承し、二人の子に最後の別れの挨拶をしたいと求め、許される（第5場）。最終場は事実上のアリア・フィナーレで、次の経過をたどり、二人の子を殺したメデアの自殺で幕を閉じる——舞台上にはメデアと二人の子のみ。蒼白く暗い顔をしたメデアは子供の間で岩に座り、子供を失うことを嘆く。シェーナ、ハーブとトランペットを伴う美しい旋律のカンタービレと続き、二人の子に何の罪もないが、彼らはジャゾーネの子だから死なねばならないと語る中間部を経て、祝いの音楽に導かれてのカバレッタとなる。自分がどんな復讐をするか見ることができ、と歌ったメデアは、二人の子の手を引いて神殿に入る。血のついた短剣を手に舞台に戻るメデアを追ってジャゾーネと人々が登場、非道な女に死を、と合唱が叫ぶ。メデアは「メデアは復讐を欲し、それをなして死ぬ」と言って短剣で自分を刺して死ぬ。人々の恐怖の叫びで幕を下ろす。

★パチーニ《メデア》第3幕より最終場(第8場) 1993年サヴォーナ、オペラ・ジョコーザ音楽祭ライブ録音リチャード・ボニング指揮 メデア:ヨランタ・オミリアン Agora 12:00

### ◎メルカダント《メデア》(1851年) \*19世紀最後のメデア・オペラ

題名 メデア (*Medea*) (トラジェディヤ・リーリカ *tragedia lirica*, 3幕)

作曲 サヴェーリオ・メルカダント (Saverio Mercadante, 1795-1870)

台本 フェリーチェ・ロマーニの台本 (1813年のマイール《コリントのメデア》) をサルヴァトーレ・カンマラーノ (Salvatore Cammarano, 1801-52) が改作 (楽曲の追加と詩句の変更)

初演: 1851年3月1日、ナポリ、サン・カルロ劇場

### メモ

- 1851年の初演だが、事実上19世紀最後のメデア・オペラとなる。台本はロマーニ《コリントのメデア》(1813年)を19世紀半ばの劇的構成や趣味に沿ってカンマラーノが改作。エジェーオはティマンテ (Timante) とされてジャゾーネのライヴァルとなり、ジャゾーネが決闘でティマンテを殺す。二人の子供も登場する。
- 楽曲構成は定型的で、メデアのアリア・フィナーレで閉じられるのはロッシーニやドニゼッティの様式を引き継ぐものと言える。